柳法雲寺
木造 阿弥陀如来坐像 修復報告書

巧匠堂

法雲寺　木造 阿弥陀如来坐像

修復報告書

平成 29 年 12 月 20 日

巧匠堂

法雲寺　木造 阿弥陀如来坐像 修復報告書

作成日：2017 年 12 月 20 日

委　　託　　者　：　法雲寺 （奈良県吉野郡吉野町柳 654）
修 復 責 任 者　：　吉水快聞
施　　工　　者　：　吉水快聞　鈴木冬覺　畑景子
修　復　期　間　：　平成 28 年 6 月 7 日～平成 29 年 12 月 20 日
目　　的　：　台座の構造強化、本体の尊容回復
内　　容　：　台座の解体、構造強化、各部材の再接合、クリーニング、剥落止め、漆箔層の剥落部分の補彩 漆塗 補箔、欠失、亡失部分の補作など

【制作年代】

本体の制作年代については、木芯を含む一木造など平安初期頃の古風な造像技法を使うが、細かい螺髪、薄い衣文など明らかに定朝様式の影響がみられるため、11 世紀後半以降～12 世紀くらいの作と考えられる。台座光背については後補（江戸時代頃？）とみられる。

【保存状態】

[本体]

・両手第 1 指上部を矧ぎ目部分から亡失。
・裳先の一部欠失。
・各所矧ぎ目に隙間。
・表面は油煙やスス埃で黒色化。
・全体的に材は堅牢とみられるが漆箔層は剥落及び遊離が激しい。
・背面に頭頂から像底に至るまで大きな干割れがみられる。
・像全体の漆箔層の剥落及び浮き上がり
・像全体に油煙の付着や埃の堆積、虫食い跡などがみられる。

［台座］

・蓮華部分のぐらつき。
・蓮弁の亡失、欠失が各所に見られる。
・蓮肉天面の穴。

[光背]

・全体的に油煙などの汚れが付着。
・周縁部唐草が付け根部分と上部を少し残しほとんど欠失。
・身光の周縁部、向かって右側の部材が、後世の修理で違う向きで接着してある。
・頭光の周縁部の上部の部材が、後世の修理で接着されているが、位置が少しずれている。
・全体に油煙の付着や埃の堆積。

【修復方針】

［本体］

◇本体は現状維持を基本とし必要に応じて、剥落止め、補彩、欠失した部材の補作を行い、尊容の回復を行う。

◇像全体に油煙の付着や埃の堆積がみられ、容姿を損ねていると同時に堆積が進行により湿気やカビ、害虫被害の原因にもなるためクリーニングを行う。

［台座］

◇台座の蓮華部分は構造が非常に脆弱なため、今後の保存に耐えかねるので、解体し構造の入れ替えを行う。

◇蓮肉天板は中央に四角い穴が開いていたが、鼠等の入り口にもなってしまうので塞ぐ。

◇框部分は構造の補強を行う。

◇欠失亡失した蓮弁等を補作し、違和感のないように古色仕上げとする。

◇全体に埃の堆積がみられ、湿気やカビ、害虫被害の原因にもなるためクリーニングを行う。

［光背］

◇現状維持を基本とし、後世の修理で接着された部材の調整再接合。

◇クリーニング。

【法量】（mm）

・木造阿弥陀如来立像

総高　1157　　像高　495　　髪際高　約 416　　白毫高 403　　耳張 131

像奥　約 303　　腹奥　154　　胸奥　122　　面奥　138　　膝前張　414

・光背

総高 731　　高 690　　ホゾ高　41　　幅　475　　奥　13

・台座

高 476　　幅 639　　奥　534

修復前（全体）

修復後（全体）

修復前（本体）

修復後（本体）

台座正面

台座左側面

台座背面

台座右側面

修復前（台座）

台座正面

台座左側面

台座背面

台座右側面

修復後（台座）

表

裏

修復前（光背）

表

裏

修復後（光背）

【本体　修復内容】

①　クリーニング

・全体に埃の体積がみられたので刷毛を使って除去。

・汚れの激しい箇所はエタノール精製水（１：１）を含ませた綿棒を用いてクリーニングを施した。

②　剥落止め

頭部、身体共に漆箔層の浮き上がりがみられるため、剥落が進行しないように木地と漆箔層の間にアクリル樹脂系接着剤を筆などで充填し、熱ゴテを用いて圧着した。

修復前頭部

木地と漆箔層の間に接着剤を入れる

テフロン紙を当て
熱ゴテで圧着

剥落止め後

③　遊離しそうな部材の再接合

左右手首上部の各材は接着が弱まり、取れそうになっていたため、一度外して、再接合した。

修復前

左手首上部材の接着剤（膠）が緩んでたため、一度解体

右手首上部材もほぼ外れていたため、こちらも一度解体

酢酸ビニル樹脂（木工ボンド）を用いて再接合

④　欠失した箇所の補作と充填、古色仕上げ

各欠失、亡失箇所を檜を用いて補作し、矧ぎ目の隙間には、木屎漆（漆＋小麦粉＋木粉）を充填、硬化後に表面を整え、錆漆（漆＋砥の粉）を塗り研いで表面を整え、違和感のないように古色仕上げを施した。

右手首の上部の欠失部分の補作

両手親指の上部の亡失部材の補作
※形が分かりやすいように墨で着色

矧ぎ目の隙間に木屎を充填→整形→木屎、補作部分に錆漆を塗る

錆漆硬化後、表面を研いで整え、古色仕上げ（修復後）

右大腿部側面の膝前材との矧目部分の欠失

（右側面修復前）

左大腿部側面の膝前材との矧目部分の欠失

（左側面修復前）

欠失部を檜で補作

鎹（かすがい）に漆を塗って錆止め処理

欠失部を檜で補作

木屎漆充填→整形→錆漆→表面を研いで整え、古色仕上げ

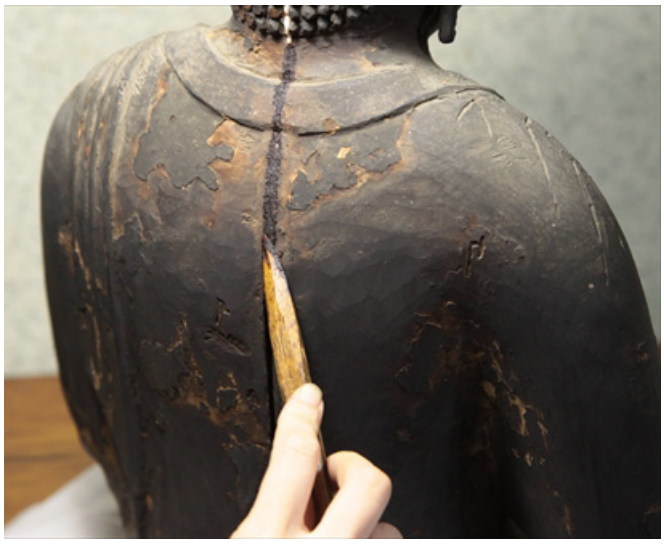
（修復後）

⑤　矧ぎ目や干割れ部分の隙間の充填

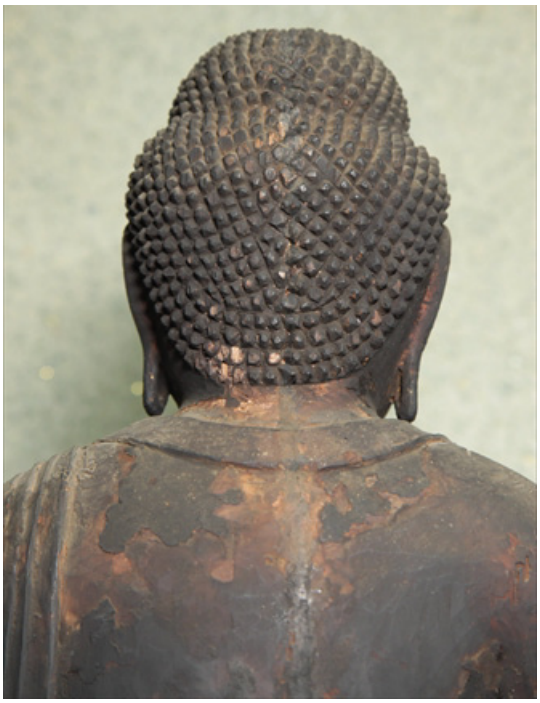
背面の干割には、檜や木屎漆（漆＋小麦粉＋木粉）を充填し、硬化後に表面を整え、錆漆（漆＋砥の粉）を塗り研いで表面を整え古色仕上げ。

修復前の背面の干割れ
（右側面修復前）

隙間の大きい箇所は檜を埋めて表面を整形



隙間の狭い箇所は木屎漆を充填



錆漆→表面を研いで整え、古色仕上げ

⑥　剥落箇所など木地が露呈して目立つ箇所は薄墨で補彩し全体の調子を整える。

本体修復完了

【台座修復内容】

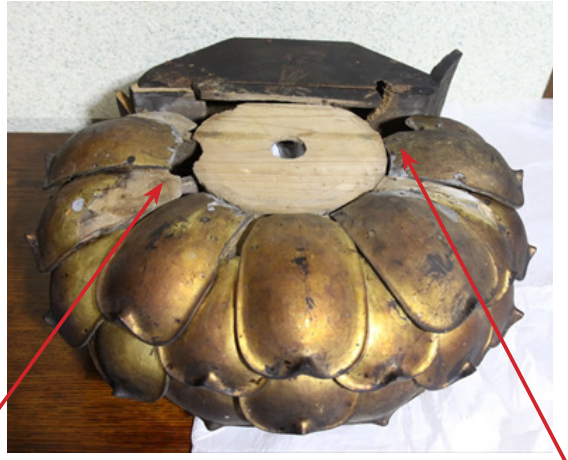
各箇所の蓮弁が遊離

蓮肉天板の穴

鼠にかじられた天板

蓮弁の位置の不一致

蓮弁各所に高圧ピン釘打機で近年修理とみられるピン



蓮華部分を外した状態（修復前）

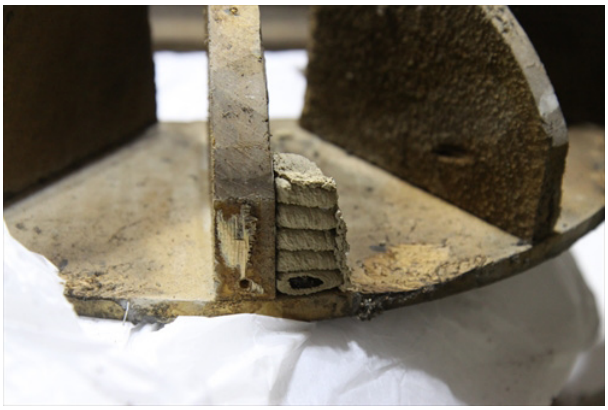
鼠にかじられた底面の穴その１

鼠にかじられた底面の穴その２

①　蓮華部分の解体

隙間に材を傷つけないように木を
当てて工具を用いて解体していく

ある程度緩んだら手で
一枚一枚はずしていく



蓮肉内部に泥蜂の巣

高圧ピン釘打機によるピン釘、すぐに錆
びて材を痛めるため一本一本すべて除去

②　蓮肉の新補と天板の穴埋め

蓮肉は、細かな部材を組んで出来ており、
各接着は膠のみで行われている。天板を
残し構造部材の入れ替えを行う。

蓮肉の構造は檜３材を寄せた塊から彫出
し、干割れを防ぐため中を内刳りし、元の
天板を寄せた。尚、天板の穴は檜で塞ぐ。

③　各部材のクリーニング

埃などの堆積は、容姿を損ねていると同時に進行すると　湿気やカビ、害虫被害の原因にもなるため現状を変えない程度のクリーニングを行った。

刷毛で全体の埃を除去

隙間に入り込んだ埃や塵をピンセットで除去

油煙などの汚れは台座全体をエタノール精製水（１：１）を含ませた綿棒を用いてクリーニング

④　欠失部分を檜で補作し違和感のないように古色をつける

蓮弁欠失箇所を檜で補作

敷茄子の欠失箇所を檜で補作

下地の錆漆を塗って研ぐ

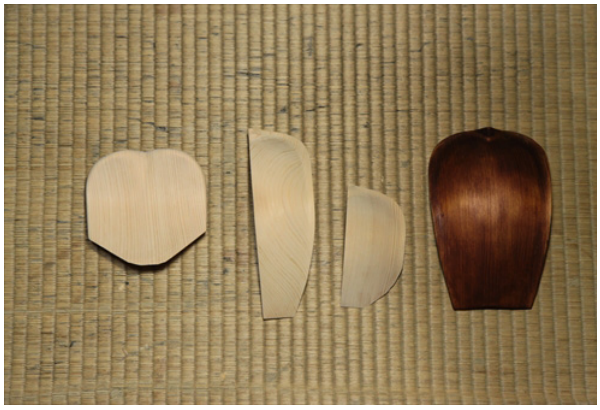
下地の錆漆を塗って研いだ状態

黒漆を塗って研ぐ

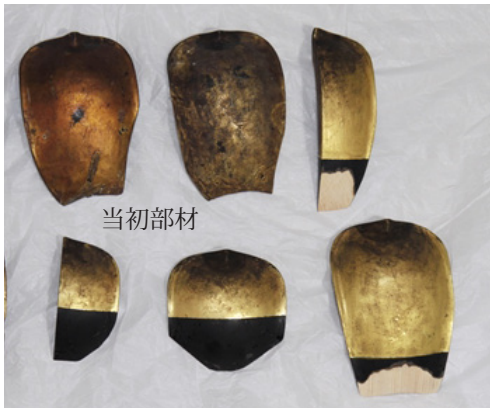
黒漆を塗って箔押し

箔押し後、アクリル絵具を用いて違和感のないように古色付け

⑤　亡失した蓮弁の新補、古色仕上げ



亡失した蓮弁を新補
※右端は生漆をしみこませて木地固めした状態



漆で下地を作り、漆箔、当初部材を参考に古色仕上げ

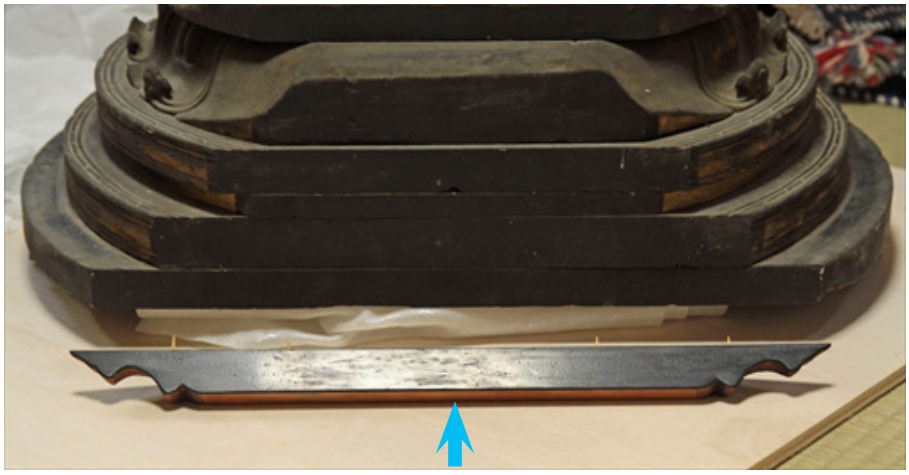
⑥　蓮肉の新補部分の古色仕上げ

檜で新補した蓮肉

錆漆による下地付け

天然岩絵具を用いて違和感のないように古色付け

⑦　台座背面、框の下の足が亡失しており不安定なため新補して古色仕上げ



檜で新補して、漆を塗り古色仕上げ（矢印部材）

⑧　台座、框部分の構造補強

台座底面（修復前）

檜材を足して構造強化（修復後）

⑨　蓮華の再接合、台座の組み上げ

新補した蓮肉部材に位置を調整しながら蓮弁を酢酸ビニル樹脂と真鍮釘を用いて付けていく

一番下の段は釘の頭が見えないように木屎漆で埋め込んで補彩

すべての部材を組み上げて台座の修復完了

【光背修復内容】

光背は現状維持とするが、割れた部材が近年の修理で、誤って接着されている箇所があったため、接着剤を除去して正位置となるよう再接合した。

隙間の空いた状態で接着されている（修復前）

外して接着剤を除去

正位置に戻し再接合（修復後）

上下が逆で接着（修復前）

外して正位置で再接着（修復後）

光背も全体的に埃の堆積がみられたため、刷毛を用いてクリーニング。

光背修復完了

【台座裏の墨書】

台座框部分の裏側には三か所、墨書がみられた。おそらく、後世に補作された台座を制作した人物の銘と思われる。尚、制作年代の銘記はみられなかった。

大佛師

大佛師　太□兵衛

妙□？　道□　妙□？